No.118　1989.3

・西南学院大学・
図書館報

『心・日本・国際化』……及能正男　2
図書館での思い出……小池雅子他4名　3～4
卒業後も図書館利用のすすめ……伊藤龍峰　5
気楽に読める専門書〈10〉……福田　靖　6
講習会参加レポート……有森義則・佐藤　誠　7
お知らせ・報告・他……　8

時間と読書

文学部教授　上野　武

「君、時というものは、それぞれの人間によって、それぞれの速さで走るものなのだよ」とある書物の中でシェイクスピアは語っている。ひとりの人間においても、体験される時間の長さはいつも同じだとは限らない。少年時代のことを回想してみると、小学校6年間の日々など、実に沢山な内容で満たされていたような気がする。それに比べて、この頃の1年の過ぎゆくことの何という速さ！

時の経過の速さを左右するのは、ひとり年令のせいばかりではない。いつも感じることだが、原稿や採点の〆切日が迫ってくると、時は飛ぶように駆け抜ける。それと対照的に、入学試験の監督で、開始ベルの直前受験生とにらめっこをしているときのあの時間の流れのおそいこと。カチッ、カチッという秒を刻む音さえ聞えるようだ。喜びの絶頂にあるときには、時は無の中に解消されるし、悲しみの深い淵に立つときには、時は死んだように凍りつく。時計が示す客観的な等質の時間と、生活現実の中で私たちが体で感じとる時間とはどうも違うようだ。時間は心の姿勢によって、ある程度豊かにもなれば貧しくもなるものらしい。不思議なことだ。

さて読書との関係だが、ひとはしばしば自らの時間の足りなさを嘆く。もしも自分にもっと沢山な時間が与えられるならば、岩波文庫を全部読破することも夢ではないと思ってしまう。しかし現実は、旧・新約聖書1冊を読み通すことさえ容易ではない。原因はいったいどこにあるのだろうか。ゲーテは次のように教えてくれる。「いつかはゴールに達するというような歩き方では駄目だ。一歩一歩がゴールであり、一歩が一歩としての価値をもたなくてはならない」と。ヒルティは更に追いうちをかける。「時間をうる最良の方法は、1週に6日 ― 5日でも7日でもなく ― 一定の昼の時間に、単に断続的でなく、規則正しく働くことである。…怠惰は、仕事よりもはるかに多く人を退屈させ、あらゆる健康の真の基礎である抵抗力を弱めるものである」と。カントのあの規則正しい生活態度は、私たちの導きの星といえるだろう。

本学の図書館には、万巻の書物が待っている。心を魅(ひ)くものも無数にある。けれども残念ながら私たちの時間には限りがある。そこで選択ということが必要になってくる。選ぶということは、何かを切り捨てることでもある。「どうでもよいこと、不必要なことをやたらに沢山知るよりも、たとえ少しでも真によいこと、必要なことを知る方がよい」とトルストイは忠告してくれている。長い歴史の批判に耐えて読み継がれてきた名著・古典を読むことをお奨めしたい。時は速く過ぎゆく。零細な時間を利用して、忍耐強く長編小説にも取り組んでみよう。よき書物に出会い、それに沈潜するとき、時は止まり、幸福の泉が私たちの心を満たすだろう。

（うえの　たけし：教育哲学）

『心・日本・国際化』

—卒業生への読書のすすめ—

経済学部教授　及能正男

これから21世紀の後半まで生きられる、わが卒業生各位。人は各自、かぼそい自分だけの証(あかし)にすがって日を送るものだ。貴君を支え、心の拠りどころとなっている信条は、だから何本もの糸をよりあわせるように沢山もった方がよい。

これから日本を舞台に展開する世界史は貴君に、激しく揺れ動く外界・日本人として何を考えていかねばならないか・西洋とかアジアとかをどう考えるかの三種の強圧で迫るに違いない。『ドゥイノの悲歌』R．M．リルケの絶唱である（岩波文庫、手塚富雄訳）。自己を見失いそうになった時、いつでも開きなさい。そして自分の「天使」を探しなさい。バラの棘の白血病で死んだ、この西欧の詩人の魂の告白は開巻一ページから貴君を突き刺し、やがて心の平静に導いてくれるであろう。ヘンリー・パーセルの『女から生れし者は（ヨブ記第14章）』の古曲はこの10章のエレジーによく似合っている。

深い西からの影響の下にあって、昭和初期の哲学者が書いた日本人とその自然への省察として『風土—人間学的考察』（岩波）がある。この本をどう読むかは各人に任されている。半世紀にもなるが、この書物の域を超える邦著はいまだ現われない。私はこの本を読むたびに、超絶的な西と日本の隔差を実見した著者和辻哲郎氏の「悲しみ」のような紙背の心境を想わずにいられない。夫人との間に交した美しいアダジオのような書簡集も名高いものだ。

しかし、昭和44年にいたって鋭利な知性と深い感情をもった日本人の描く西欧分析の本が生れている。『ヨーロッパ像の転換（西尾幹二、新潮選書）』はニクソン就任・東大事件・哲学者ヤスパースの死の1969年に出版され、日本の実質二桁成長の最後の年、おそらくは再び今世紀中は現出しえない高度成長期最終年に出た。憧れと隔差だけがヨーロッパと日本を隔てていた固定観念像を、日本を知るために西洋を観るのだという新しい視点から著者は執拗なまでに書く。現代日本の知識人の新しい挑戦である。

新しい日本人の理性が愛憎ただならぬ太平洋の向う側の巨大国アメリカとのわが国の「かかわりあい」を大胆に描いた本も1986年に出た。『日米戦争は終っていない（江藤淳、文芸春秋社）』である。夏目漱石・小林秀雄を書き、アメリカに学んだ著者の投じた一石である。明治の日本の対外戦争や軍事化に関心の深い、この東工大教授は深まりゆく日米関係のきずなの前途に何かの予感を感じているのであろう。敗戦の年に国民学校六年生であった私は、戦争という不幸なヴェールなしにアメリカを眺めることも４年間のニューヨーク生活を送ることもできなかった。われわれは深く米国とかかわりあっている。日本人にとってアメリカは巨大な自然環境ですらある。貴君達はこの大国といずれは対決し、抱擁し、和解する世紀に生きるのだ。

（きゅうの　まさお：国際金融・外国為替）

図書館での思い出

後輩のみなさんへ

文学部児童教育学科4年
小池雅子

「君は一年生かね？」

「は、はい」

「89期生でね、もうカード更新した人がいるんだよ。君も、大学四年間、たくさん本を読みなさいね」

四年前の五月の半ば、こうして初めての図書館の手続きを前にして緊張気味であった私を知ってか知らずか、図書館窓口の職員の方の言葉かけが、大学図書館との出会いでした。熊本の田舎から進学してきて、見知らぬ人達と慣れない校舎、カリキュラムにがっちりはめこまれていた私は、あの一言で〝西南っていい所だなぁ〟とすっかりリラックスした事をつい最近の事のように思い出します。

四年間は、正に矢のように過ぎ、大学とは物の見方を学び自分なりのフレームをもつところであるという事が、今になって実感として残ります。モラトリアム世代という言葉が使われて久しいですが、一生において知力も体力もベストであり「第二の誕生」ともいわれるこの青年期に、モラトリアムだなんてもったいないですよね。西南のカラーの「緑」は、熟してはいないけれど生きようとする若者をイメージさせます。〝素質と努力だけでは成功しない。広く課題を追求する力が必要だ〟といわれる今日、この緑の杜のキャンパスで、そして図書館で、己の知を生命をおおいにふくらませて下さい。

（こいけ　まさこ）

商学部商学科4年
國分麻里

今日も図書館の君はおられるかしら。私は二段越しで階段を駆けのぼる。いつもの窓際の席へ素早く目をやり、いとしの君が座っておられるのを確認し、ホッとする。

あら、今日は私が何度挑戦してもダメだった、ソルジェニーツィンの「収容所列島」を読んでおられるわ。昨日までは、二年生の時に読んだ陳舜臣の「阿片戦争」だったし・・・。あの尊敬する教授も若かりし頃はああではなかったか。本も服装もえりあしも、私の趣味にピッタリ。さすがは夢にみた理想の君。私は胸をときめかせながら、「剣道日本」をパラパラとめくる。

私が一ヶ月もこうしてお姿を拝見しているのを知ってるかしら。私は心の中で気合を入れる。今日こそは声をおかけしよう。お化粧のノリもいいことだし・・・。私は覚悟をきめ、君の後ろに立ち息を止めた。

「あのー、私ずっと毎日あなたを見詰めていました。」振りむく君は、キラキラした目で一言。「僕もだよ。」

ヤッター!!と思った瞬間、したたかにおでこを打った。まわりの人がその音に驚き、嘲笑している。そして我にかえった私は、あわてて本のシミを拭きとったのである。

やはり図書館は、空想的世界に浸る場所であり、ロマンスは生まれにくい所である。

（こくぶ　まり）

経済学部経済学科4年
仲山英俊

僕にとって、図書館という空間は、ただ本を読んだり、勉強をしたりするだけの所とは違っていたような気がする。それでは僕にとってその空間は一体何だったのか。そのことを確めたくて、久しぶりに図書館へ足を運んだ。

閲覧室の机で、辞書を片手に必死に勉強している男子学生を横目に、本棚から二冊本を取った。するとその本の重みとともに、様々な思いがよぎって来た。そしてその瞬間、僕にとって図書館が何だったのか解ってきた。

考えてみると僕は、一人になりたい時、図書館へ通ったものだった。そしてそこで、ぼんやりと人を眺めたり、考え事をしたりして過した。四年間、毎日毎日を慌ただしく過してきた僕にとって、図書館は心の安らぎを取り戻す為の空間だったのかも知れない。だから本を読むつもりで行っても、一行も読まずにいることもあった。それでも折角来たのだからと、本だけは借りて行き、結局読まずに、大抵延滞料付で返却した。しかも一ヶ月遅れで返却した時は、延滞料どころか始末書ものだったこともある…。

ある意味で僕は、図書館を履き違えた学生だったかも知れない。けれどもそんな僕を、図書館はいつも静かに迎えてくれた。だからこそ今、そんな図書館に、有難う、さよなら、そしてこれからも沢山の学生を迎えて下さいと言いたい。

(なかやま　ひでとし)

法学部法律学科4年
西園則幸

大学は学生自らが、自らの方法で「学問」することが許されるところである。私たちは、講義を聴く以外に、あるテーマに関する様々な人たちの考え方を比較分析し、その批判をとおして、「自分自身の考え方」を形成することができる。そして、この積極的・能動的姿勢に対して手助けをしてくれるのが図書館である。

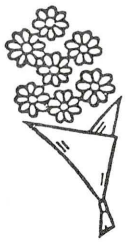
図書館を利用することにおける利点を二つ挙げたい。第一に、自明のごとく、他人の考え方を深く知り理解するためには、不動のものである文字、つまり著書をジックリ読むことが最適であるということ。書物を数冊机にひろげて研究すれば、数人の考え方を、同時に把握することができる。

第二に、私たちが何かを手に入れるためには通常、その代価を払わねばならないが、図書館は、無償で、私たちに知識を与えてくれる。本気で知識を得ようとすれば、高価な専門書を何冊も購入する能力のない学生は、図書館を利用する以外に手はない。

「自分自身の考えを持つ」ということは、大学生に課せられた、非常に重要な課題の一つである、と私は思う。したがって、後輩諸君には図書館を大いに利用して、一つでも多くの考え方を知り、分析・理解・批判をとおして、自分の考え、あるいは考え方を形成していってもらいたい。

(にしぞの　のりゆき)

******図書館での思い出********



特別利用者から

卒業後も図書館利用のすすめ

九州産業大学商学部講師　伊藤龍峰

本学の図書館は卒業生に対しても、特別利用者という形で開放されており、私も利用させていただいている。

私は大学院終了後、他大学の教員として勤務しているので、図書館というものから縁が切れない生活をしているが、私の場合、当然に勤務先の図書館を利用することが多い。しかしながら、それだけで必要とする文献の全てが揃うという訳ではない。本来、いかなる図書館（たとえ国会図書館のような大規模の図書館であろうと）も、完璧に文献を取り揃えることは不可能だと考えられる。したがって、特別利用者として本学の図書館をも自由に利用させていただいている私にとっては、二つの図書館を利用することで相互に補完作用が働くことになり、強力な武器となっている。

ところで、わかりきった話ではあるが、図書館とは膨大な情報が蓄積されたバンクであり、その情報はカードを検索することによって（あるいは第六感で当りをつけて）、直ちに取り出すことができる。私は職業柄、古いものから新しいものまで、常に情報を必要としているのであるが、このことは何も私のような職種の人間に限ったことではない。知的欲求は人間共通のものであり、絶えず満たしてやらなければならない。そのための手段として、本学の卒業生は、まず第一に母校の図書館を思い出すべきである（もちろん、時間的・距離的制約を受けることになるが）。

考えてみると、特別利用というのは、近年とみにその必要性が叫ばれている生涯学習のために、本学が用意している制度として捉えることができるのである。付言すると、我が国の大学では、生涯学習を目的とした制度としては、各大学によって名称は異なるが、卒業生を対象とした特別利用の制度以外、寡聞ではあるが、無いに等しい状況のようである。したがって、この制度は、大学が時代の要請に応じて出した現段階での答えなのである。私達は、この答えを十分に評価するとともに、当然の権利として、大いに、そして有効に利用すべきであり、また、そうしないという手はない。なぜならば、大学自体をより開かれたものにするための突破口だからである。

どうも紙幅のことも考えずに話を飛躍させてしまったようである。まだまだ述べ足りない点があるが、以下では、本学図書館に対してどうしても希望したい事を一点だけ記述することで終りにしたい。

希望というのは、コピー機の増設である。コピー機は、現在、学生用として二階カウンター前に一台設置されているだけである。そして、この機械を特別利用者も使うことになる。ただ前・後期の試験の際や、コピー量の多い場合等は特別利用者としては使用が憚られることがある。是非とも、増設することで当方の負担感の軽減をお願いしたい。また同時に、コピー料金の値下げについても御一考下さるよう望みたい。

とりとめのない文章になりましたが、母校のますますの発展を祈念しております。

（いとう　たつみね：昭和60年
経営学研究科博士課程終了）

気楽に読める専門書〈10〉

『アメリカ英語の語法』

835
K5
3

小西友七著　研究社出版発行

文学部外国語学科
英語専攻課程主任　福田　靖

一口に英語の学習といっても、その学び方やテーマは、個人の好みや必要に応じていろいろ違ったものになる。たとえばアメリカ英語の研究も興味あるテーマの一つではなかろうか。現在アメリカ英語に対する必要、関心が高まっていることは間違いないが、それは今日のわが国が政治、経済の面はもとよりその他の面でもイギリスよりも大体アメリカのほうを向いていることや英語教育の中に口語英語が多く取り入れられるようになったことと大きな関係があると思われる。アメリカ英語とは勿論、イギリス英語に対する呼び方であるが、従来のように単に語彙や発音、綴りの差異のほかに語法上の面からも明確な特徴を持つ独自の言語体系としてのアメリカ英語が市民権を得始めているように思える。本書は語法を中心とするアメリカ英語の研究書であるが、アメリカ英語の歴史的背景、イギリス英語との関係、南部アメリカ英語、黒人英語の問題にも触れ、更に語法上の基本的特徴についても解説している。例えば会話表現でよく使われるgonna(=going to), wanna(=want to), Wuddaya (=What do you) think? Let's go give him a try. などはアメリカ英語独特の省略語法であるとか、all of this, get through with, face up to, I got it for free.などは余剰語法であるが、強調的効果をはたしているとか、またdifferent thanやcannot help but doなどはアメリカ英語によく見られる混交（交錯）語法の例であるということなどがわかる。各語についての用例はいずれも有名作品、新聞、雑誌、辞書の原典から取ったもので信頼できる。さらに有難いことにはそれぞれの語法がアメリカ英語特有の表現であるとか、イギリスでも使われるが、アメリカのほうがはるかに頻度が高いというような説明が加えられていることである。またdown payment(頭金), hamburger to go(持ち帰り), back-to-school sale (新学期セール), Sorry, we are closed.(閉店中)などはアメリカで生活しているとしょっちゅう目（耳）にする用語であるのに、教養が邪魔して（？）文法的には説明しにくい言葉でもある。しかしそれらを誤りだとか、例外やslangというふうに片付けるのではなく、imformal, concise, activeを重んじる国民性によって自然に形成されたれっきとしたアメリカ英語であると考えることができれば割とすんなり受入れられるのではないだろうか。

本書はまた自分の好きな項目だけを拾い読みしても興味が持てるので気軽に一読することをおすすめしたい。その後では新聞、雑誌を読んだり、英会話の実践はもちろんのこと文法学習や文学講読の際も戸惑いが少なくなるのではないかと信じている。

（ふくだ　やすし：文学部教授・商業英語）

講習会参加レポート

図書館は変わる ―大学図書館職員講習会報告

情報サービス課　有森義則

講習会は、昭和63年11月28日から12月1日の4日間の日程で行われた。私が参加した東京会場（東大総合図書館）には、主に関東の大学を中心に84機関、百余名の参加者があった。その目的は、大学図書館活動を促進するため、大学図書館の中堅職員（図書館経験年数2年以上）に、図書館業務の最新の知識及び専門的技術を習得させ、その資質の向上を図るというものであった。

次にその内容については、講義の他共同討議、又東大総合図書館と学情センターの見学も行われ、これから、図書館業務を行う上で参考になる事も多く、有意義であった。

最後に、この講習会を通しての主要テーマについて簡単に述べると次のとおりである。

今日の情報化社会において、大学図書館がその使命を果たすためには、これまでの図書館のあり方から、大きく外に踏み出す（変化する）ことが必要である。それには、図書館の組織・運営、職員の資質などの変化、又図書に対する大学一般人の考え方の変化も必要となる。大学図書館にとって、これから大切な事は、単なる保存庫として機能するのではなく、大学における研究者等のニーズに、速く、的確に対応できる学術情報のセンターとしての機能を果たすことである。従って、その機能を果たすことができるかどうかに、大学図書館の将来がかかわってくると考えられる。

（ありもり　よしのり）

〝著作権〟理解と注意を ―九州地区著作権講習会報告

整理課　佐藤　誠

著作権とは著作者が書籍や雑誌などの著作物に関して有する経済的利益を確保する権利の総称であり、著作権者は著作物に対し独占的に利用する財産権を有する。

著作権を侵害せずに他人の著作物を利用する場合は、著作権者を調べ、許諾を取り、著作権料を支払うことになる。これは不可能に近い。

そこで、考えられたのが設立が決定している『日本複写権センター』である。ここでは、書籍、雑誌などの著作物のコピーの利用者から一括して著作権料を徴収、管理するものである。しかし、著作権にも制限があり、個人的に限られた範囲内で使用する場合は複製することは認められている。図書館等においても、利用者が調査研究のため著作物の一部分を、一人につき一部に限ることを条件に複製することができる。

現代の複写機器の発達、普及は目覚ましい。録音・録画機器についてもほとんどの家庭で利用されておりこれらの機器が著作権を侵害し著作権者の利益を損なっている大本であることは言うまでもない。

本学の図書館にも複写機が備えられ利用されているが、上にも述べているように著作権には多くの規定がありこれを理解するとともに複写・複製する場合には著作権の侵害がないように十分に注意したいものである。

（さとう　まこと）

▷▷図書館業務の電算化について◁◁

大学の研究・教育に不可欠な図書や雑誌などの学術情報を効果的に収集・管理し、利用者の要請に応じて、迅速かつ的確に資料の提供ができるように現在、図書館業務の電算化を進めています。専用コンピュータとしてHITAC　M－630/10を導入し、当面４月からの図書の発注・受入、整理業務など一部稼働をめざして、目下システム構築を行なっているところです。

今後は更に処理範囲を拡大し、図書館業務のトータルシステムとして1991年４月の全面稼働に向け、開発を進めていく予定です。

お知らせ

○春休み中の開館

２月４日(土)～４月10日(月)

９：00～21：00※この間、学習室は閉室。

○春休み長期貸出し

貸出期間

１月24日(火)～４月11日(火)

返却期限

４月22日(土)

（但し、卒業･修了予定者は２月末日）

対象および冊数

学部学生・専攻科生	5冊以内
留学生別科学生	10冊以内
大学院生	20冊以内

○卒業後の図書館利用の手続き

本学の卒業生は、卒業後も図書館を利用できます。利用希望者は手続きに次のものが必要です。

①特別利用許可願（本館備付）	１通
②卒業（修了）証明書	１通
③証明書用写真（３cm×４cm）	１葉
④印鑑	
⑤利用料金（１ヵ月）	１００円

※入館、貸出し手続きは在学中と変わりませんが、貸出し冊数および期間は年間（休暇中を含め）を通じて３冊、11日以内です。なお、緊急に資料および調査が必要なときは閲覧係にご相談下さい。

積極的な利用をお勧めします。

☆　報　告　☆

〈図書館委員会〉

○63．11．17　①個人研究図書費による雑誌の購入について、②明年度学部雑誌の継続購入について、③図書館業務電算化の進捗状況とそれに伴う図書分類の一部変更について、④明年度大学図書館予算（申請）について

○１．１．27．①平成元年度図書館申請予算の査定について、②明年度雑誌予算増額分の配分見込額について、③図書館電算化の進捗状況について、④昭和63年度在庫調査の実施について、⑤ＥＣ研究会開催について、⑥児童教育学科から申請の特別雑誌費について

〈研修・出張〉

○第74回全国図書館大会

63．10．26～28　　於：調布市グリーンホール他　　堤次長出席

○昭和63年度私立大学図書館協会西地区部会九州地区研究会

63．11．４　　於：福岡ガーデンパレス　篠崎課長、有森司書、吉村司書補、田渕司書補、吉積司書補出席

○第９回大学図書館研究集会

63．11．24～25　　於：法政大学（多摩）　伊藤係長出席

○第20回国連寄託図書館会議

63．11．24～25　　於：国立国会図書館　古庄司書出席

○昭和63年度大学図書館職員講習会

63．11．28～12．１　　於：東京大学総合図書館　　有森司書出席

〈本学開催の研究会等〉

○第５回九州ＥＣ研究会

１．１．28　　於：学術研究所　21名出席

研究報告

①松川太一郎氏（九州大学大学院）

「ヨーロッパ共同体の統合経済勘定体系（ＥＳＡ）に関する一考察」

②杉本幸生氏（佐賀大学）

「ＥＣアンチ・ダンピング制度をめぐって――部品課税問題を中心に」

西南学院大学図書館報　No.118　1989（平成元）年３月23日発行
編集　館報編集委員会
発行　西南学院大学図書館　〒814 福岡市早良区西新6丁目2番92号　ＴＥＬ(092)841－1311(代)